令和５年度　喜多方市

小学校農業科作文コンクール

作品集

喜多方市教育委員会

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長　佐川　正人

今年度も市内の全小学校十七校、千四百二十七名の児童が農業科に取り組みました。各農業科支援員の皆様をはじめ、会津農林事務所様、会津よつば農業協同組合様、県立会津農林高校耶麻校舎様、多くの関係機関の皆様のご支援とご協力をいただきましたことに対して心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症が第五類感染症に移行されましたが、活動場面に応じた適切な感染症対策を講じながら、変化と潤いのある学校生活を目指して、農業科の実践を行ってきました。今年度の活動を通して児童が大きく成長したことが、素直な文章で綴られていました。コロナ禍前の状態に少しずつ戻りつつある学校生活の中で、児童が農業科の魅力を十分に味わっていること、そして、たくさんの大きな成果を残していることに対し、心からうれしく思います。

今年度も、本市の農業科の意義を再確認することができました。それは農業科の実践が、広く知られ、全国各地から多くの視察や取材を受け、農業科の発足からの経緯を辿ったことです。その中で、本市の基幹産

業が農業であることや農業科に先駆けて平成十五年度から食農教育が小中学校で実施されたことなど、多くの要因が重なり、今の農業科が誕生しました。この農業科の活動を通して、子どもたちが人間としてよりよく生きるための多くの気付きや、社会全体が抱える課題解決へのヒントがあると評価してくださる方が多々いらっしゃることがその証でもあります。農業科がねらいとする「豊かな心の育成」「社会性の育成」「主体性の育成」を継続しながら、農業科を発展させていきたいと心を新たにすることができました。

そして今年度も、市内の全小学校十七校の三年生以上の児童が、小学校農業科作文コンクールに取り組みました。紙面の都合上、入賞した二十八点の作品のみの掲載となりますが、本コンクールに取り組んだ全ての児童に心から感謝を伝えます。

結びに、ご多用の中、貴重なご指導をくださった関東学院大学教授の佐藤幸也先生、研究会での多くのご意見をいただくとともに、作文を慎重に審査くださった審査員の皆様へ感謝を申し上げます。今後もこれまで同様のご支援とご協力を賜りますようお願いいたしまして、発刊にあたっての挨拶とさせていただきます。

目　次

【大　賞】

農業の大変さ　第二小学校　六年　黒澤　日和　1

「福良」最高！　第一小学校　五年　大八木　健心　2

やってみなけりゃ分からない　第三小学校　四年　三須　紬葉　3

【優秀賞】

農業科を通して　豊川小学校　六年　中川　航佑　4

感謝を忘れないで　熊倉小学校　五年　武藤　慶　5

農業科で学んだこと　第一小学校　四年　小山　華奈　6

大豆を育ててみて　第一小学校　三年　大森　綾乃　7

がんばって作ったニンジン　高郷小学校　三年　佐藤　和史　8

【農業科賞】

お米作りを通して
関柴小学校　六年　鈴木　瑛人　9
一つの種からできること
熊倉小学校　六年　齋藤　礼　10
夏の生き物調査
加納小学校　六年　森田　一平　11
農業科の学習を通して成長したわたし
堂島小学校　六年　佐藤　小夏　12
「いただきます」の本当の意味
姥堂小学校　六年　東條　莉々　13
みんなで協力したお米作り
第二小学校　五年　北見　日那　14
楽しみな農業科の学習
松山小学校　五年　加藤　心美　15
協力して作った作物
熱塩小学校　五年　瓜生　栞奈　16
落花生を育てて気がついたこと
堂島小学校　五年　五十嵐　花笑　17
農業支援員さんの思いやり
駒形小学校　五年　佐藤　悠香　18
最強のジャガイモ
豊川小学校　四年　折笠　陽菜　19
人参を育てることの大変さ
慶徳小学校　四年　後藤　咲良　20

食のありがたさ
堂島小学校　四年　左雨　里歩　21
大しゅうかくサツマイモ
塩川小学校　四年　渡部　瑛心　22
農業体験をして
山都小学校　四年　佐藤　優愛　23
農業の学習で分かったこと
第二小学校　三年　長澤　莉桜　24
がんばったお米作り
上三宮小学校　三年　菊地　智華　25
大へんだった今年の人じんさいばい
慶徳小学校　三年　渡部　生　26
カボチャのさいばい
塩川小学校　三年　田代　千明　27
暑さに負けたやさいたち
姥堂小学校　三年　戸田　ゆり乃　28

【少年の主張より】

未来への種蒔き
塩川中学校　三年　塚原　千穂

【大賞】

農業の大変さ

第二小学校　六年　黒澤　日和

「今年のねぎはどうやって食べようかな。」と、今年も収穫する日をとても楽しみに待っていました。

私たちは今年も長ねぎを育てました。去年の長ねぎは、とてもよく育ち、野菜が苦手な私でもおいしく食べることができました。だから、収穫が近づくにつれてとても楽しみでした。しかし、夏休みが終わったある日、先生から、「長ねぎが今年の暑さでだめになった。」と聞いて、食べることを楽しみにしていた私はとてもショックを受けました。みんなも、「暑かったから、しょうがないよね。」と言ってすぐにあきらめていました。私も、今年の暑さはすごかったから仕方ないかと思っていました。

でも、家族とスーパーに買い物に行ったとき、野菜コーナーにはよく育った長ねぎが並んでいるのを見て、ある疑問が浮かんできました。同じような気候で育てても、なぜスーパーには長ねぎがあるんだろう？

そこで、私は自分たちの育て方を振り返ってみました。すると、とても暑い中、草むしりや水やりはほとんど先生たちにまかせ、農業科の活動でも、「面倒くさい」と思いながら草むしりをしていた自分が思い浮かびました。こんな態度で長ねぎを食べることだけを楽しみにしていた自分にだんだん腹が立ってきました。また、去年まではそんな態度でも気候に恵まれていたため、収穫ができて農業は簡単だと思っていたことも恥ずかしくなりました。

作物を育てるために、様々な工夫をして、とても大変なことでも面倒くさがらずに続けるということは簡単にはできません。今年、長ねぎの栽培に失敗したことで、食べ物一つを作るにも、農家の方々の知恵と苦労がかくれていることを実感することができました。今年の農業科の学習は、農業の大変さに気付く機会となりました。

【大賞】

「福良」最高！

第一小学校　五年　大八木　健心

「五年生の農業科は米作りです。」

この言葉を聞き、ぼくはとてもうれしかった。なぜなら、ぼくの祖父と同じ体験ができるからだ。ぼくの祖父は毎年、田起こし、代かき、田植え、そして秋には稲かりと、一つの作業も欠かさずに毎年おいしいお米を作ってくれる。そんな祖父にあこがれていた。祖父が毎年してくれている作業をぼく達もできると思うとうれしかった。

特に、心に残っているのは、五月の田植え。祖父の作業と大きくちがうのは田植えの方法だ。機械で行う田植えをぼく達は手作業で行った。最初は泥まみれになるのがいやだな、と思いつつも田んぼの中に足を入れた。入ったしゅん間、予想通りドロドロで下の方は冷たかった。なれないまま田植えをしていると、支援員の小林さんが「間かくを空けるといいよ。」とアドバイスしてくれた。さっそくやってみると、最初にやったものよりもきれいに植える事ができた。手作業の田植えは、想像以上に大変だったけれど、昔の人の苦労を味わう事ができた。

米の収かく後は米の販売。米の名前は「福良」と書いて「ふっくら」。福島の良い米という意味をこめてネーミングした。これはぼくのアイディアだ。販売当日、七十袋の米は見事に完売。自分達のお米が売れたと思うと、とてもうれしかった。

そして、つい最近。お世話になった支援員さんへの感謝の会を開いた。内容は収かくした米を自分達で食べ、感謝の気持ちを伝えるというものだ。ご飯やみそ汁を作る過程は全て自分達で行った。ご飯を一口食べてみると、ものすごく甘くておいしかった。祖父には悪いけれど、これは祖父の作ったお米よりおいしかったかもしれない。やはり自分達の手で作るものは最高の味だということを実感した。そしてぼく達が毎日おいしい米を食べられることにも感謝だ。じいちゃん、いつもありがとう。じいちゃんの米も最高だよ。

やってみなけりゃ分からない

第三小学校　四年　三須　紬葉

「大変そうだな。」

私は、夏の暑い日に畑に行くじいじとばあばを見ながら、そんなことを思いました。私の家では、じいじとばあばが米や野菜を育てています。今年の夏は、雨がふらず、とっても暑い日が続きました。私たち兄弟はすずしい部屋の中にいるのに、仕事に行く二人の姿を見て、私はすごいと思いました。

なぜそんなことを思ったのかには理由があります。それは、小学校でやっている農業科の学習です。夏休み前のある日、クラスのみんなで畑の草むしりと水やりをしました。外にいるだけで汗ビッショリになる天気で、やりたくないと思ってしまいました。私は友達とやっているふりをしていました。でも、その時にじいじとばあばの顔がうかびました。暑い日も寒い日も、もんくを言わずに仕事に行くじいじとばあば。せいぜい私たちは、十分位の仕事なのに…。そんなことを考えると自分のことが情けなくなりました。手が少しよごれたり、虫がいたりするだけで大声を出していた自分ですが、こんな自分をじいじとばあばが見ていたら悲しい気持ちになるかもしれないと思い、ゆう気を出して仕事をすることにしました。虫が近くにいてこわい。土がつめの中に入ってくる。それでも私は、友達といっしょにがんばりました。仕事が終わってから飲んだ水の味はとってもおいしかったです。

農業科の学習を通して、自分がいやだと思うことや辛いと思うことも、ちょう戦することが大切だということを学びました。

「やってみなけりゃ分からない。」

私は、苦手なことや、自分がいやだなと思うことも、まずはやってみることを大切にしたいと思います。

【優秀賞】

農業科を通して

豊川小学校　六年　中川　航佑

ぼくは、三年生から六年生までの四年間、農業科の学習をしてきました。その中でも、五、六年生で行った米づくりが、特に思い出として残っています。その米作りでは、二つのことが印象に残っています。

一つ目は、脱穀です。なぜかというと、同じ班の人やちがう班の人とも協力して作業することができたからです。また、千歯こきを使うことで、昔の人はどれだけ大変だったかを、実際に体験することができたからです。この脱穀を通して、友達と協力することの大切さや昔の人の農業の大変さを知ることができ、とてもよい機会になりました。

二つ目は、収穫祭です。なぜかというと、米づくりの最後の学習で、今までの米づくりの集大成だからです。収穫祭では、おにぎりとみそ汁をつくるため、二つに分かれて行いました。つくるときは、友達と協力して、水の量や野菜を入れる時間を気をつけながらつくることができました。食べる時は、その食材をつくってくださった農家の方に感謝しながら食べることができました。収穫祭を通して、友達と協力する大切さ、その食材をつくってくださった農家の人に対する感謝の気持ちを知ることができました。最後にふさわしい学習となったのでとてもよかったです。

この他にも、農業科の学習をしていて、気づいたことがあります。それは、いくつかの教科が農業科と結びついているということです。例えば、社会です。社会の資料集を見ていると「その土地の地形や特ちょうを生かして野菜をつくっている」と書かれていました。農業科の学習でも「その土地の気候などを生かして米をつくっている」ということを学びました。そこから、「農作物は、その土地の地形や気候を生かしてつくっているのではないか」と考えました。だから農業科は、昔の人々の知恵を学ばせてくれる、大切な活動だと思いました。

【優秀賞】

感謝を忘れないで

熊倉小学校　五年　武藤　慶

「感謝の気持ちを忘れないでいよう。」

今年の農業科の学習を通して、ぼくはこのような思いを強くもつようになりました。

五年生は、農業科で米づくりに挑戦しました。地主の山口さんや農業科支援員の皆さんに手伝っていただきながら、種まきや苗の管理、田植え、稲刈りをしました。昨年も田植えや稲刈りはしましたが、種まきや苗の管理は初めてだったので、少しきん張しました。

五月に田植えをした稲はすくすくと成長し、十月にはたわわに実ったお米を収穫することができました。収穫したお米は、五年生で袋づめをして全校生や地域の方々に配りました。すると、

「今年の熊っ子米はいつも以上においしかったです。ありがとう。」

という感謝の手紙を地域の方からいただきました。それを読んで、ぼくはとてもうれしい気持ちになりました。とても大変だったけれど、がんばってよかったと思いました。

ぼくの家では、おじいちゃんとおばあちゃんがアスパラや野菜、お米を育てています。ぼくも時々手伝いをしますが、とても大変でした。これを毎日のようにやっているのかと思うと、どれだけ大変なのかを想像するのは難しくありません。

学校の給食には、喜多方産の野菜や果物がたくさん使われています。農家の方がたくさんの手間ひまをかけて育てられたものだと考えると、感謝の気持ちをもたずにはいられないと思いました。これからは、今まで以上に農家の方や食材に感謝する気持ちを忘れず、好き嫌いせずにいただきたいです。

農業科で学んだこと

第一小学校　四年　小山　華奈

四年生の農業科の始まりは、みんなで今年は何を育てたいのかを話し合ったことです。育てた作物は、調理して食べることを聞きわくわくしました。わたしは、にんじんを育てたかったけれど、友達が、

「じゃがいもを育てたい。」

と言っていて、それもいいなと思いました。話し合いの結果、かぼちゃを育てることになりました。育てる品種は「雪化しょう」です。

六月に種を植えました。種の色がイメージと異なり、青色で、みんなでおどろきました。においはなくて、少し白いこながついていました。不思議だなと思うことが多かったです。種を植えてからは、しばらく、ベランダで育てわたしが水やりの当番で、毎日欠かさず水をあげました。責任をもって水やりをすることがとても大変でした。かぼちゃは、わずか三日間で芽を出し、成長の早さにおどろきました。一番成長が早い芽は、五日目で、葉が三枚になっていました。その反対に、葉が一枚も出ていないものもあって、成長の差に気づくことができました。苗を畑に植えかえるために、畑の整備をしました。みんなで土を耕す作業は、一体感があって、とても楽しかったです。

十月に収穫し、調理してみんなで食べました。調理班の人たちが、かぼちゃをペースト状にして、砂糖と牛乳を加えたものをクラッカーと一しょに食べました。全員で育てたかぼちゃをみんなでおいしく食べることができ、とても満足しました。

農業科の学習を通して、農家の大変さを知ることができました。特に、育てることの大変さです。同じものでも、育ちかたがちがうので戸まどうことがありました。多くの作物を育てている人は様々な方法で管理しているのではないかと思うと、苦労が伝わりました。これからは、作ってくれる人にかんしゃしてお弁当や給食を残さずに大切に食べていきたいです。この気持ちを家族にも伝えたいです。

大豆を育ててみて

第一小学校　三年　大森　綾乃

わたしたち三年生は、農業科のじゅ業で、はじめて大豆を育てました。

大豆のたねを植える時に、農家のすず木かずとよさんに教わりながら一人二つぶずつ植えました。その日から水やりの世話をしながらなえのせい長をかんさつすることになりましたが、校しゃから植えた場所まで、はなれているので水やりをするのが大へんでした。また、夏の暑い日がつづいたので、水やりをしても、すぐに土がかわいてしまって、かれてしまわないか心配でした。けれども、九月に行った時には、えだ豆の形に少しずつなっていたので暑さに負けずにせい長してくれて、うれしかったです。

秋になり、しゅうかくの時期には大豆は、りっぱなえだ豆になっていて夏ころに思っていたよりえだ豆の大きさは、大きくなっていました。わたしが今までお店で見てきたえだ豆は、ビニールぶくろにカットされたさやだけで、今回はじめて、くきにぶらさがっているじょうたいの、えだ豆を見れてよかったです。なぜなら、えだ豆は土の中に出来るとわたしは思っていたからです。そして、自分たちで育てたえだ豆と、お店で売っているえだ豆をゆでて食べくらべをしました。お店で売っているえだ豆と育てたえだ豆のちがいは、売っているえだ豆の方が見た目がよく感じました。けれども味は、自分たちで作ったからなのか、お店の物よりもおいしかったです。

その後に、国語の時間に「すがたをかえる大豆」というじゅ業をやりました。そこで、ふだん食べているみそ、しょう油、なっ豆、豆ふ、油あげなどの食品は大豆から出来ているのは知っていたけれど、きなこやもやしも大豆から出来ていることは、はじめて知りました。なので大豆は、いろいろと形をかえてりょう理に出されているので大豆は大切な食べものであると分かりました。これからは、大豆を大事に食べていきたいです。

がんばって作ったニンジン

高郷小学校　三年　佐藤　和史

ぼくは、農業科でニンジンを育てました。しゅうかくするまでにいろいろなことがありました。

ぼくが、ニンジンを育てて一番思い出にのこったことは、イモムシたいさくのために、大豆を植えかえたことです。ニンジンの葉っぱにアゲハチョウのよう虫が、たくさんつくので、いつもわりばしで取っていました。しかし、何度でもやって来るので、キリがありませんでした。そこで、インターネットでたいさくを調べました。すると、枝豆の根っこについている「きん」が、アゲハチョウのよう虫を来なくするこうかがあると書いてありました。このように、いっしょに植えると虫が来なくなるような植物を「コンパニオンプランツ」ということを知りました。四年生が育てている大豆を少し分けてもらい、三年生の畑に植えかえました。そのけっか、よう虫が、ぜんぜん来なくなりました。

ふしぎだと思ったことは、たねの大きさです。ニンジンのたねは、直径が一ミリメートルぐらいの小さなたねでした。このたねから本当にニンジンができるのかしんじられませんでした。こんなに小さな物からニンジンができるなんてすごいと思いました。今度、たねの中にどんな物が入っているのか調べてみたいです。

ぼくは、ニンジンを育ててうまくいかなくてがっかりしたこともありました。それは、ニンジンの大きさです。見えている葉っぱは、とても大きかったので、スーパーで売っているようなりっぱなニンジンになっていると思ってぬいてみました。でも、すごく細くて短かったです。太くて長いニンジンを作っている農家さんをすごいと思いました。来年は、野さいがもっと大きく育つように水やりをがんばりたいです。そして、作った野さいを持ち帰って家族とおいしく食べたいです。

お米作りを通して

関柴小学校　六年　鈴木　瑛人

「お米は、農家の人が苦労して育てているだから、一粒も残しちゃダメだよ。」

と、ぼくのお茶碗に残っているお米を見て、おばあちゃんによく言われていた。ぼくは、「たくさんあるんだから一粒ぐらい残してもいいじゃん。」と二年間のお米作りを経験する前までは、そう思っていた。

田植え。ぐちゃぐちゃの泥に足をつっこんで、田んぼに線を引き、稲の苗を植える。汗をかきながら、苗を取りに何度も田んぼの中を往復する。「昔の農家の人は毎年やっていたのかと思うと、お米を作るのって、やっぱり大変だなぁ。」と思った。

その後、現在のお米作りにも、作業がたくさんあって除草や田んぼの水の管理、肥料の調節、稲の育ちの確認などたくさんの作業があることを、社会科の授業で知った。農家の人はすごいなぁと思った。

そして、稲刈り。大きく育った稲を鎌でザクザク切る。刈ってみるとよく切れて楽しい。でも、大変だ。何が大変かと言うと、何をやっても重労働なことだ。今は、農家の方も、コンバインなどの機械でやっているところも多いが、やってみると、その大変さも実感でき、おばあちゃんが言っていたお米一粒一粒を大切にする思いも分かり、感謝して食べたいと思った。

この二年間のお米作りを通してぼくは、農業支援員さんへの感謝とともに、普段食べている米や野菜などの食物を育てている農家の方への思いもわいてくるようになった。たくさんの作業をするにもその思いがあって、いろいろな苦労をしてぼくたちの所に届けられている。ぼくたちは、今年、自分たちが収穫した作物を地域の方に届ける活動をした。苦労して作った自分たちのお米を地域の方に食べてもらって、うれしかった。だからこそ、若い人でも働きやすい仕組みや農業に興味をもってもらう環境づくりも大事なのではないかと思うようになった。

一つの種からできること

熊倉小学校　六年　齋藤　礼

「今年はみんなで会津伝統野菜を育てよう。」

会津伝統野菜とは四百年前に作られていた野菜。中でも小菊かぼちゃは戊辰戦争で城にこもった人も食べたという。しかし、残念ながら今は、生産者も食べる人も減っている。

育てるにあたって私達は、会津伝統野菜を世界に広める活動をしている長谷川さんという方のお話を聞いた。長谷川さんは伝統野菜の種を配って、世界の国々と交流を行っている。そんな長谷川さんは「四百年続いている伝統野菜を、自分達の時代に終わらせてはいけない」という強い思いをもっていた。

私達は、数ある伝統野菜の中でも、小菊かぼちゃとかおり枝豆を育てようと決めた。今年の夏のきびしい暑さで育ちが悪かったり、虫が大発生して、野菜の葉がスカスカになるほどくわれてしまったりするなど、野菜作りの難しさを感じることが何度もあった。「せっかく作ってきたのに。」と悔しい気持ちになったが、野菜の成長は思い通りにいかないこと、むくわれない世話もあるのだと学ぶことができた。だからこそ、野菜作りは面白いのかもしれない。順調ではなかったが、とうとう夏休み明け、かぼちゃはゴロゴロと大量に実り、枝豆も全校生でゆでて食べるほどたくさんの実をつけた。みんなうれしくて、両手にかぼちゃや枝豆をかかえて、畑中が笑顔であふれる収穫の時間となった。調理したかぼちゃスープやずんだ団子は、これが伝統の味なのだと思うと、本当においしく感じられた。私達の苦労が最高の味付けだったと思う。

私達は、絶滅の危機もあった会津伝統野菜をこの手で作りあげた。伝統野菜の歴史をふり返ると、それはとてもすごいことだ。伝統野菜の種は一センチもない小さな種だ。でもそこには、四百年の伝統がつまっていて、何倍もの大きさの野菜となって収穫できる。何より私達に、野菜を育てる楽しさを改めて教えてくれた。一つぶの種から広がる可能性は無限大なのだ。

夏の生き物調査

加納小学校　六年　森田　一平

「田んぼで生き物をつかまえたかったな。」

今年の六月三十日に、ぼくたちは水田で、生き物調査を行う予定でした。だけど、その日は雨で、水田での生き物調査はできませんでした。ぼくは楽しみにしていたので、できなくて残念でした。そのかわりに、新潟県のさどから来てくださった方が、雨の中、ぼくたちの水田に行って、生き物をとって来てくださりました。ぼくはその生き物の中でも、ゲンゴロウがいたことにおどろきました。学校の水田にいるとは思わなかったからです。ぼくがゲンゴロウを見たのは、これが生まれて初めてでした。初めて見てかっこいいと思いました。

全農の山崎さんのお話も聞きました。

「田んぼがなくなると、今日見つかった生き物たちもいなくなるんだよ。」

その話を聞いて、ぼくは、「田んぼを残していかないといけないのだな。」と思いました。ぼくはこれから田んぼを大事にしていきたいと思います。そのために、毎日お米を食べていきたいです。ぼくがお米を食べることが、田んぼを守ることにつながると思います。そうすることで、かっこいいゲンゴロウも守ることができます。生き物たちのすみ家を守るためにも、大人になってもお米を食べ続けたいです。

日本中のみんなが、これからもたくさんお米を食べてくれますように。そして田んぼが田んぼでありつづけられますように。

農業科の学習を通して成長したわたし

堂島小学校　六年　佐藤　小夏

「漢字の十になっているところに苗を植えるんだよ。」私が一年生のとき当時の六年生が優しく苗の植え方を教えてくれました。六年生になった今、下級生に教える立場になりました。この六年間の稲作活動を通して学んだことが三つあります。

一つ目は育てることの大変さです。毎年どろだらけになりながら苗を植えたり、収穫をした後も干したり、脱穀作業をします。家では農業をしていないのでこの六年間の稲作活動で大変さを学ぶことができました。

二つ目は食べることへの感謝です。私達が食べているお米一粒一粒には育てている人の手間と苦労がつまっています。昔は何も考えずに食べていたお米。今では「いただきます。」と感謝を込めて言えるようになりました。これからも一粒一粒に手間と苦労がつまっていることを忘れずに、感謝して食べたいです。

三つ目は農業の楽しさです。初めて作業した時は大変で「あと六年も続けなきゃいけないんだ。」と感じていました。ですが、育てたお米で作ったもちを食べた時とても美味くて収穫した喜びを味わいました。そして年々農業科が楽しくなって農業の楽しさを学ぶことができました。

六年間の稲作活動で学んだことは稲作活動をしていなかったら学ぶことができていなかったと思います。学ぶことができたのは農業科支援員さん、昔ながらの伝統を引き継いでくれた卒業生の方々などのお陰です。改めて感謝を伝えたいです。今、私の将来の夢は教師になることです。先生になったら子ども達に農業科の楽しさやお米の大切さを教えることも夢です。

六年間、自然豊かで笑顔あふれている堂島で農業科を学べて本当によかったです。学んだことはこれからも大切にしていきます。

「いただきます」の本当の意味

姥堂小学校　六年　東條　莉々

「いただきます。」

毎日あいさつをして、給食をいただく。こんなにおいしい給食を食べることができるなんて幸せだなと感じる。野菜の中でもさつまいもが好きな私は、さつまいもを使ったメニューが出ると最高の気分になる。

だから、今年育てる作物の話し合いで、

「むらさきいもを育ててみたい。」

という意見が出たとき、私は瞬時に賛成した。結局、私と同じ意見の人が多く今年はむらさきいもを育てることに決まった。しかし、むらさきいもは今までの小学校生活で一度も育てたことがなかった。だから、むらさきいもについて一から調べた。むらさきいもは、日当たりの良いところでないと大きく成長しないことが分かった。日光という自然の力がないと作物は育たない。人間の力だけでは作れないのだと改めて知った。そして何より、どんな作物を育てるときも土が良くなければ育たないと分かった。土が良いとはどういうことなのだろうか。私は、良い土の条件について調べた。まず、肥料をまいて栄養をたくさん含ませる必要があった。だから、今年の肥料まきは去年よりもがんばって土と肥料をよく混ぜた。作物を作ることはここがスタートなのかと思うと、とても気が遠くなった。農家さんは毎年いろいろな作物を育てるために苦労しているのだと実感した。改めて、農家さんは尊敬するべき存在だと思った。

私は、小学生最後の農業でたくさんのことを学んだ。「いただきます」の本当の意味。私は、食べ物の命に感謝することはもちろんだが、育ててくださった方への感謝、そして自然への感謝も含まれているのではないかと考える。今まで何気なく言っていた「いただきます」だったけれども、これからは学んだことを胸に「いただきます」と心から一生言えたらいいなと強く思う。

みんなで協力したお米作り

第二小学校　五年　北見　日那

「こんなにちくちくしているの。」「本当にこれがあの私達が毎日食べているふわふわのお米になるの。」どの活動をするときも、私の中には最初、ぎ問がたくさんありました。

まずは、種まきです。このときに、初めてもみをさわりました。ちくちくしていて、少し黄土色をしていたので、「本当にこれがあの白いお米になるのかな。」と思いながらも土にもみをまいて、土をかぶせ、「元気になってね。」と、心の中で言いながら、たっぷり水をあげました。

二つ目は、田植えです。苗が十センチメートルほどに成長したころに、田植えをしました。田植えをする前に、「じょうばん」という物で、植える所の目印をします。私はそれをさせてもらいました。どろは少し重くて、足がひっぱられそうになりながら、じょうばんをひきました。何人かがじょうばんひきをして、目印をつけたところで、田植えが始まりました。田の面積はけっこう広くて、「こんな広い所に苗を植えるのか。長い時間かかるんだろうな。」と思っていましたが、学年のみんなとの協力で、私が思っていた二倍ほど早く終わりました。このときは、お米ができるのが楽しみで、わくわくしていました。

そして、三つ目は、待ちに待った収穫です。私たちは、暑い間田んぼには行っていなかったけれど、農業科支援員さんがお世話をしてくださっていたおかげで、稲がよく育っていました。最初は十センチメートルほどだったのに、八十センチメートルほどになっていて、とてもおどろきました。私は稲刈りをするのが初めてだったので不安だったけれど、安部さんに稲刈りのやり方やコツをしっかりと教えていただいたので、安全に、楽しく稲刈りをすることができました。

どれも初めてのことばっかりで、最初は不安でした。でも、安部さんに優しく、ていねいに教えて頂いたので、楽しくできました。一生に一度のすてきな経験になりました。

楽しみな農業科の学習

松山小学校　五年　加藤　心美

毎年農業科の学習が楽しみな私。今年はいよいよ米作りです。

私は料理をすることが大好きです。なので自分たちで作ったお米でおいしいごはんを作りたいなと思いました。田植えもとても楽しみにしていましたが、田んぼの中にいる虫がちょっと気持ち悪かったです。三本の指で苗をぎゅっと深く植えました。ちゃんと植えられたかな、たおれていないかなと、心配なこともありましたが、終わってみると楽しさの方が勝っていました。

稲刈りまでは農業科支援員の方々がお世話をしてくださったので、直接私たちが関わることはありませんでした。でも本当だったら草刈りや草取り、追肥、水の管理等、やることはたくさんあることを授業で学びました。今年はもう暑だったので、田んぼに水がなくたいへんだったことをお母さんが教えてくれました。なので、収穫するまで、本当に心配でしたが、無事に稲刈りができたので、とてもうれしかったです。

作物を育てることのたいへんさは、これまでの農業科の学習で学んできたし、社会科の授業で食品ロスの問題を学んだので、できるだけ残さずに食べることが大切なんだと頭では分かっています。しかし、実際の私は、きらいな食べ物を見てしまうと、なかなか口にすることができず、残してしまいます。でもいつか、きらいな物もおいしく食べられるように少しずつですが努力しています。

農業科の学習で学んだ作物を収穫するまでのたいへんさを、毎日の食事やこれからがんばっていきたい調理の時にもわすれず、むだを作らないようにしていきたいと思います。

協力して作った作物

熱塩小学校　五年　瓜生　栞奈

わたしたちは、この一年間で三つの作物を作りました。

その中でも一番大変だったのが米を作ることです。特に、田植えが大変でした。五月ころに学校の田んぼで全校生が稲を植えました。最初は、ぐちゃぐちゃで直しながらやっていたけれどなれてくるとだんだん上手くなってきてうれしかったです。田の草取りでは、ペアで協力し、田車を使い雑草を取りました。一往復進むのが大変でしたが、おしたり、引いたりするのをがんばりました。

稲かりでは、初めてかまを使ったけれど、けがをせずにできてよかったです。約五センチメートルあけなくてはいけないので、そこを意識してかりました。

二つ目は、小豆を育てました。今年は、暑すぎて小豆の量が少なかったです。しかもたくさん虫に食われていて大きく育つか心配でした。暑くてあまり外では遊べないほどの暑さだったから小豆も暑かっただろうなと思いました。

三つ目は、感動カボチャを育てました。苗植えは、しっかり植えられるように意識することができました。水やりでは、水場から畑まで行く坂を下りたり、坂を登ったりすることが大変でした。でも、水がないとおいしいカボチャが育たないので暑かったけどがんばりました。去年はすごく大きく、楽しみでしたが、今年はすごく小さく少なかったのでざん念でした。来年は、もっと大きくて多い感動カボチャになってほしいです。

毎年、熱塩小学校では、各学年いろいろな野菜を育て、しゅうかくし、食べています。中学校や高校では、なかなかこんなにたくさんの野菜を育てたりしゅうかくしたりすることができないと思うので、来年六年生になったら今までで一番よい作物を育てたいです。

落花生を育てて気がついたこと

堂島小学校　五年　五十嵐　花笑

「今年も、落花生を育てます。」と先生がおっしゃったとき、落花生なら去年も育てたから同じように簡単だろうと私は思った。けれども、落花生を育てているうちに、去年はわからなかったことに今年はいろいろと気がつくことができた。

五月に赤い種をまいた。これは、もともと赤色ではなく、鳥に食べられないように赤色にするというのがわかった。こんな小さな種にも育てる人の工夫が入っているなんておどろいた。種まきをしてから、その上にとう明な糸をはじからはじまで張っていった。糸がキラキラ光って鳥がよってこないのだそうだ。これも鳥に食べられないようにするための工夫だ。

芽が出てきたときはうれしかった。私がまいた種がたくさん芽を出していた。でもまき忘れた所には、芽が出てない。残念だったし、まいてあげればよかったな、忘れてごめんねと心の中で思った。

一番大変なのは水やりと雑草抜きの作業だ。暑くても水やりをやらなくてはならない。雑草ぬきもあせを流しながらみんなでがんばった。

十月の収かくの時はきん張した。落花生がちぎれないようにそっと土をほっているとドキドキしてきた。落花生の周りの土を全部ほると、すっと抜けた。一本にたくさんの実がついている。今までがんばってよかったなと思った。

落花生作りは去年もやったけれど、今年は農家の人の工夫や物を育てたり、収かくしたりすることのすばらしさに気づくことができた。鳥から守るため、種を赤くそめたり、上にとう明な糸を張ったりと、ただ育てるだけでなく、そこに農業をする人の思いがこめられていると思う。去年は気づけなかったことに今年は少しだけど気づけたのがうれしい。来年はもっといろいろな事に気がつけるように積極的に農業科に取り組みたい。

農業支援員さんの思いやり

駒形小学校　五年　佐藤　悠香

この春、私は農業科の授業で初めて米作りを体験しました。米作りは簡単そうに思っていましたが、昔の機具を使って、私たちの手で作る米は、手をぬいてしまうと苗の生長にえいきょうが出るなど、育てていくことが大変でした。その大変な米作りを最後までできたのは、農業支援員さんがいてくださったからだと思います。

私たちが田んぼに行くと、いつも農業支援員さんがいました。最初は種もみの用意をされて、その種もみがどう育っていくのか分かりやすく教えてくださいました。そして、苗を植えるとき、草を取るときには、じょうばんやころばしなど、一人で動かすには少し大変な器具も準備してくださいました。私は、農業で米を作ったり、育てたりしたことがなく何も分からない初心者でしたが、分かりやすく教えていただいたおかげで上手にできました。また、困った人、大変そうにしている人を見かけたら、やさしく教えているところを見て、農業支援員さんの思いやりを感じました。

そう感じてから、私は農業支援員さんにお返ししたいと思い米作りのことをしっかり覚えようと思いました。苗床づくり、田植え、田ぐるまおし、稲刈りと、メモを取ったり絵を描いたりしながら、覚えました。稲刈りでは、刈ったあとに稲を結ぶところが難しく、そのときに教えていただいたコツもメモに残しました。

私は、農業支援員さんが自分や家族、みんなのために米づくりをしていること、たくさんの日にちをかけて米を作っていることに、すごく感心しました。農業支援員さんの思いやりの気持ちを感じながら、これからはお米を大切にし、ごはん、給食を食べようと思います。自分が学んだことをしっかりと頭の中に入れて、来年の米作りをむかえたいです。

最強のジャガイモ

豊川小学校　四年　折笠　陽菜

わたしたち四年生は、今年の農業科でジャガイモを育てました。今年の夏は、とても暑い日が続き、三階の教室の空気は毎日どんよりしていました。

「こんなに暑いのに、ジャガイモなんて育つのかなぁ。」と言う人もいました。わたしも、ジャガイモ畑は外だから、さぞかし暑いだろうな、かわいそうだなと思っていました。草むしりも、とても暑くて熱中症のきけんから、十分くらいしかできずに、ジャガイモにもうしわけないと思いました。それでも、暑さはいっこうにおさまらず、不安な日が続きました。

しかし、しばらくして畑に観察に出かけてみてびっくりしました。なんと、ジャガイモは、この暑さをものともせずに、葉は青々と色付き、くきも太くじょうぶに育っていたのです。ジャガイモの無事を知り、わたしは、ほっとしました。

そしてむかえたしゅうかくの日、やっぱりとても暑い日でしたが、かれたくきをどかしてスコップを入れると、大きくてごつごつしたりっぱなジャガイモが、土の中からたくさん出てきました。あんなに小さかった種いもから、こんなにたくさんのジャガイモができるなんて信じられませんでした。数えると二百個をこえる大豊作でした。

そして、待ちに待ったしゅうかく祭。私たちは、これまでお世話になった農業支えん員の細田さんと、草むしりを手伝っていただいた用務員の高笠さんをおまねきして、「ジャガイモパーティー」を開きました。私たちが育てたジャガイモでカレーライスとポテトサラダを作り、みんなでおいしくいただきました。細田さんからは、「暑さに負けずおいしく育ってよかったね。」と言われました。わたしたちもがんばったけれど、一番がんばったのは、ジャガイモだと思います。暑い中、外で大きくおいしく育ったジャガイモは、最強だなと思いました。

人参を育てることの大変さ

慶徳小学校　四年　後藤　咲良

わたしの家ではおばあちゃんが農業をやっているので手伝ったことがありますが、今年農業科で初めて人参を育てることになりました。品種は「ベーターリッチ」です。

まず、真っ直ぐ植えるためにつもり棒でうねに線を引き、その上に指で十五cmぐらいの間かくで土に穴をあけ、二つぶぐらいずつ種を置きました。やさしく土をかぶせた後、水分を保つためにぬかをふりかけました。数日後、わたしはおばあちゃんと一しょに学校の畑を見に行きました。しかし、人参の芽は一つも出ていなかったので、びっくりしました。

「なぜ、人参の芽が出てないの。」

おばあちゃんに聞いてみると、

「たぶん、雨上がりで土がどろどろだったから、ダメだったんじゃないかな。」

と、言いました。どうしたら人参の芽が出るのか家で調べてノートに書きとめました。おばあちゃんと一しょに畑に行き、そのノートを参考に、ぬかをかけたり、水をあげたりしました。わたしが習い事の日には、おばあちゃんが一人でやってくれました。九月二十日に行くと、やっと人参の芽が出ていました。十三本出ていて、くきの長さは五cmぐらいでした。葉っぱはさわやかでいいにおいでした。家に帰ってすぐにおばあちゃんに報告すると、「よかったねえ。芽が出るまでは毎日畑に行かないといけないからね。」と、言いました。十一月八日には、やっと人参が大きくなったので収穫に行きました。ゴボウのように細い人参、ゴツゴツした人参、割れた人参、虫に食べられた人参など、様々な人参がありました。全部で三十八本とれたので、収穫の喜びは味わえたけれど、収穫感謝祭で食べるカレーの材料には足りなかったので、農業の難しさを実感しました。

これからは、わたしの身近に田んぼや畑があるので、よく観察してきょう味をもち続けて見ていきたいです。そして、自分の生活に生かしていきたいと思います。

食のありがたさ

堂島小学校　四年　左雨　里歩

わたしは、毎日お母さんやおばあちゃんがつくる料理をただ、「おいしいなぁ。」と思いながら食べていました。その中で私が一番好きな料理は、野菜たっぷりカレーライスです。その米や野菜は、おじいちゃんが作ったものです。食たくにならぶ食材について、あまり考えたことがありませんでした。でも、農業科の学習をしていくうちに、深く考えるようになってきました。春にたねまきをして、秋にしゅうかくをしてお米になるまでには日数と手間がすごくかかります。今は、機械やドローンなどを使って人の手間を少なくできる方法もありますが、堂島小学校では、昔ながらの方法で行っていて、より大変さが分かりました。その中で、心に残ったのはじょ草作業です。ころばしという道具を使ってじょ草します。足がどろにうまってしまったり、前に進むのが大変で転びそうになったりもしたけれど、おいしいお米を作るためにはやらないといけないことなので、つらいと思ってもあきらめないでできました。一つ一つの作業を班のみんなといっしょに出来たのもお米ができた時のよろこびにつながりました。

休みの日に家でも田んぼや畑の手伝いをしたことがあるけれど、おじいちゃん達は、朝早くから夕方まで、畑の手入れや草むしり、しゅうかく作業など暑い日も寒い日も関係なく毎日仕事に行くので大変だなと思っています。

農業科の活動を通して、お米を育ててみてお米を育てる人は、手間ひまかけて、食べる人のことを考えて作っているのかなと思いました。お米の他にも、野菜や魚、肉など食たくにならぶまでにはたくさんの人がかかわっています。これからは、作っている人や、育てている人、生きものに感しゃの気持ちをこめながら、米一つぶも無だにしないでおいしく食べたいと思います。

大しゅうかくサツマイモ

塩川小学校　四年　渡部　瑛心

今年、ぼくたち四年生は、さつまいもを育てることになりました。苗を最初に見た時、ぼくは、「こんなに細い苗で、あんなに太いさつまいもが本当にできるのか。」と思いながら苗を一本一本優しく植えました。

「さつまいもは、根付くまでが大事だから、根っこに十分水やりしてな。」

支えん員の菅谷さんが教えてくれました。今年は、特に暑かったので、朝の涼しいうちにみんなで水やりをしたり、草むしりをしたりしました。

十月。収かくの時がきました。となりに植えられていた大豆やカボチャは、今年の暑さにやられ、ほとんど育っていません。とつ然昨年の大雨でかぼちゃが全めつしてしまったことを思い出しました。「ぼくたちのさつまいもは大丈夫だろうか。」心配しながら、作業に取りかかりました。

最初は、草むしりです。ぼくの腰までのびた草は、力一ぱい引っ張らないとぬけません。何度もしりもちをつきながらむしっていたその時です。さつまいもの頭がひょっこり見えました。それもかなり大きいです。「もしかしたら。」期待でドキドキしながら、土の中に手をつっこみました。

「わあ。おおきい。」

出てくる出てくる。大小様々のさつまいもが次から次へと。と中、ムカデやミミズ、ナメクジなどがたくさん出てきて「いやだなあ。」とも思いましたが、やっているうちにすっかりなれて、友達になったみたいな気持ちになりました。結局、一輪車四台分以上のさつまいもがとれました。大豊作です。

一人三本ずつ家に持ち帰ると、母がスイートポテトを作ってくれました。みんなで育てたさつまいもはとても甘くて、ほっぺたが落ちそうになる位おいしかったです。

ぼくのそ父母の家も農家です。今まで農作業にあまりきょう味がなかったのですが、これからは色々お手伝いしたいなと思いました。

農業体験をして

山都小学校　四年　佐藤　優愛

私は、今回の農業体験活動から、食べ物を作ってくださる方へ感しゃして、食事をいただきたいと強く思えるようになりました。

私が二学期、山都小学校に来たばかりの時、大豆畑は、草が私のむねの高さまでしげっていました。夏だったこともあり、その草を引っこぬくのは、とても大変でした。でも、みんなと一緒にやると、とても楽しい作業になりました。なぜ草むしりをしなければならないのか分からなかったので調べてみたところ、草に栄養を取られて大豆がうまく育たず、かれてしまうことが分かりました。

草むしりを無事に終え、次に畑に来た時には、大豆がすくすく育っていて、しゅうかくが楽しみだなぁと思いました。しゅうかく前の大豆は、色が白っぽく黒い点々がついていて、表面となかみがまだふにゃふにゃしていました。本当に大豆になるのかが心配です。

十一月十日、いよいよ待ちにまった大豆のしゅうかくの日がやってきました。草むしりから始まり、観察して成長を感じながら育てた大豆をしゅうかくするのは、とてもうれしくわくわくしました。しゅうかく作業開始です。かり取った大豆の向きをそろえて、軽トラックの荷台に積む作業をみんなで協力してやりました。二週間ほど外でかんそうさせた後、大豆を地面にたたきつけて、さやから大豆の丸いつぶを出す「豆ぶち」という作業をしました。「豆ぶち」をした後は、「とうみ」といって、ごみと大豆を分別する機械を使いました。「とうみ」を回す時、ハンドルが意外と重く、うでがとてもつかれました。

農業体験を通して、大豆を一から作ることの大変さ、むずかしさを知ることができました。店に行けばすぐに買える大豆食品ですがこんなに大変な作業をして作っていたことを知り、食べ物に対する考えを見直すきっかけとなりました。これからは、作っている方の気持ちになって、大切に食べようと思います。

農業の学習で分かったこと

第二小学校　三年　長澤　莉桜

農業の学習が始まりました。はじめての学習なので、どんなことをするのかわくわくしました。

わたしたちは、じゃがいもを植えることになりました。農業しえん員のたな木さんに植え方を教えてもらいました。

「じゃがいもには水をあげなくてもいい。」

と聞き、とてもびっくりしました。水がなくても本当に育つのか心ぱいでしたが、ちゃんとじゃがいもは大きくなっていきました。じゃがいもってすごいなと思いました。

ざっ草がどんどんふえてきたので、草むしりをすることになりました。はじめは、暑かったし、むしってもむしってもなかなかなくならなかったので、やりたくないと思いました。でも、じゃがいもがよく育つようにと考えて、みんなできょう力してがんばってむしりました。すると、じゃがいもはどんどん育っていきました。

二学期になり、いよいよしゅうかくになりました。畑の土がとてもかたくて、ほるのが大へんでした。それでも、一生けん命ほったら、小さなじゃがいもが一つだけとれました。ぜんぜんとれなかった友だちもたくさんいました。がんばって育ててきたのに、ぜんぜんしゅうかくできなかったので、みんながっかりしました。でも、それにはわけがありました。今年の夏はとても暑く、雨がほとんどふらなかったからだそうです。だから、ざんねんだったけれど、しかたがないんだなと思いました。

じゃがいもを育ててみて分かったことは、天こうによって、野さい作りは、よくできたり悪くなったりするということです。野さいを作っている農家の人たちは、天気を気にしながら、草とりなどの世話を毎日やっていると考えると、農業って大へんな仕事なんだと分かりました。わたしのおじいちゃんも野さいを作っているので、手伝えることはせっきょくてきにやっていこうと思いました。

がんばったお米作り

上三宮小学校　三年　菊地　智華

わたしは今年、田植えといねかりをしました。はじめてだったので、どういうことをするのかわからなくて、とてもふあんでした。

五月になり、田植えをしました。田植えは、はだしでどろどろの田んぼの中に入ります。入ってみると、思ったよりもつめたくておどろきました。なえを植えている時は、足が田んぼにうまって、いどうするのがむずかしかったです。でも、ころばずに上手にできました。「りっぱに育つように」と思いながらやりました。その日から、お米ができるのが、楽しみになりました。

田植えをした日から五カ月がたち、いよいよ、いねかりです。田んぼに行くと、いねがとても大きくなっていて、びっくりしました。実さいに、いねをかるやり方を、しえん員さんに教えてもらいました。すると、すらすらといねをかることができました。いねをたばねてから、きかいでだっこくをしました。みんなできょう力してだっこくをしたら、たくさんとれました。友だち四人でやっと持てるくらいのおもさでした。しゅうかく祭で食べるのが楽しみでした。

十一月になり、しゅうかく祭の日がきました。自分たちが作ったお米をたいてもらって食べました。とてもおいしかったです。しゅうかく祭では、畑で作った野さいを使って、とんじるやスイートポテトサラダ、つけものなども作りました。どのりょう理も、とてもおいしくできました。おいしいごはんが、よりおいしかったです。

今年、はじめて米作りをして、ふあんだったけど、いろいろなことを知ることができました。農業科しえん員の人たちに、やさしくていねいに教えてもらったことで、とても楽しく活動することができました。今年の米作りのことを思い出しながら、来年も、おいしいお米を、みんなといっしょに作りたいです。

大へんだった今年の人じんさいばい

慶徳小学校　三年　渡部　生

学校の畑ににんじんのたねをうえました。九週間ぐらいたつと、小さいめが出てきました。葉っぱの数が多くてびっくりしました。もっと大きくなったらどのくらい数がふえるのかな、とわくわくしました。毎朝登校するときに畑を見ていたけれど、しばらく小さいままだったので心配でした。せっかくめが出ても葉っぱがしなしなしているのもありました。そこで原いんは何かなと、みんなで考えて、調べてみると、それは今年の夏の気温の高さが関係していました。人じんのめが育つ温度は、二十～三十度で、今年の気温は三十五度をこえる日があったからということでした。

それでも、ぼくたち三・四年生は水をいっぱいあげ続けました。しえん員さん達も米ぬかをかけて水分をたもつようにしたり、まわりに糸を引いてぼうに結んで鳥に食べられないようにしてくれたりしました。そのおかげで、人じんも少しずつ育ってきました。ようやく大きくなったと安心していると、今度はアゲハチョウのよう虫が葉っぱを食べていました。三・四年生のみんなは、

「うわっ気持ちわるい。でも、かわいそう。」

と、言いながら何とかよう虫を取りました。

七月十三日に植えて、十一月九日にしゅうかくできました。小さい人じんや大きい人じんがあり、中には大きくてもくさっていたり、虫に食べられたりしているのもありました。しえん員さんをしょうたいして、収穫感謝祭で食べるカレーを作る時は、あまりにも人じんがでこぼこしていて皮をむくのが大変でした。できあがったカレーを食べながら、しえん員の荒川さんが、

「農業ってむずかしくて、大変だよね。それでも、農業って、楽しい？」

と、聞きました。ぼく達みんなはすぐに、

「楽しい！」

と答えると、荒川さんは、喜んでいました。ぼくは農業を通して、農業の大変さとしえん員さんのやさしさに気づくことができました。

カボチャのさいばい

塩川小学校　三年　田代　千明

わたしは、カボチャのなえ植えからしゅうかくまでしてきて、思ったことがあります。

まず、なえ植えでのことです。なえ植えの仕方は、農業科しえん員のすがやさんが教えてくれました。カボチャのなえ植えでは、なえに水をあげるのですが、二リットルのペットボトル一本分も水をあげたのが、とてもびっくりしました。

二学期になると、わたしたちが植えたカボチャがしゅうかくされていました。今年の夏は暑かったので、先生たちが早めにしゅうかくしてくれたそうです。さいしょにカボチャを見た時に、緑色でつやつやしていておいしそうないいカボチャになっていました。先生が、

「去年は、水がいできれいなカボチャがしゅうかくできなかったみたいですよ。」

と教えてくれました。だから、わたしたちが去年の三年生の気持ちも一しょにおいしく食べたいと思いました。

九月二十八日に、カボチャパーティーをしました。作ったのは、カボチャのあまからやきです。グループできょう力して作ったのでとてもおいしく感じました。おいしかったので、帰ってから、お母さんといっしょに作って、家族みんなで食べました。

秋になって、すずしくなってから、三年生全員でかんしゃしながら畑の草かりをしました。畑の草やマルチという黒いビニールを、取ったりして、くつがよごれてしまうほど、がんばって取りました。わたしだけでなくみんなのくつもよごれていたので、みんなでがんばったのだなあと思いました。

今年の農業科でのカボチャのさいばい体けんは、わたしにとって大変だったことも楽しかったこともあって、とてもよい思い出になりました。この体けんを来年の農業科体けんに生かしたいと思いました。カボチャのさいばいが楽しかったので、他の野菜にもちょうせんしてみたいです。

暑さに負けたやさいたち

姥堂小学校　三年　戸田　ゆり乃

今年、わたしたち三、四年生は、ピーマンときゅうり、トマトやすいか、そして、さつまいもを育てました。

今回はたねではなく、すべてなえから育てます。なえの植え方を教わりながら、植え終わるとあとは水をあげたりざっ草をぬいたりして育つのをまつだけです。ずい分たってから畑に行くと、もう草がボーボーです。すごく暑い中がんばってぬいても、まだ草はのこっていました。その後、どれくらい育っているか様子を見に行くと、ピーマンは赤いものがたくさんあるし、トマトはぐちゃぐちゃなものだらけだし、すいかはもう大きくなっているはずなのに、まだりんごサイズでした。今年はものすごい暑さで、やさいたちもその暑さに負けてしまったのかと悲しくなりました。でも、なんとか暑さにたえたものをいくつかしゅうかくすることができました。そして秋。楽しみにしていたさつまいもほりです。ものすごく太く、ごつごつしたさつまいもがとれました。これで、みんなでスイーツを作ることになりました。わたしは、自分が調べたスイーツを作りたいという思いでタブレットを使ってむ中でレシピをさがしました。そざいのおいしさを感じられるかんたんなレシピとしてえらんだのが、しぼり出しさつまいもモンブランです。すると、わたしの思いがつたわったのか見事さい用されました。太いさつまいもは切るのが大へんでしたが、あまいさつまいもがバニラアイスでなめらかになってとてもおいしいスイーツになりました。

今年は、暑さでやさいがうまく育ちませんでした。でも、植物は生きているんだからもっとこまめに様子を見に行ったり、水をあげたり、たくさんお世話をしたら、きっと緑色のピーマンがとれたし、ツヤツヤのトマトがとれたかもしれません。来年は、たくさんお世話をしよう。そしてできたやさいでまた新しいレシピをさがして、おいしいりょう理をかんせいさせるまでが目ひょうです。

【少年の主張喜多方市大会　中学生の部　最優秀賞】

未来への種蒔き

塩川中学校　三年　塚原　千穂

皆さんは、いつも何気なく食べている学校給食について、深く考えたことはありますか。この野菜やお肉はどこの産地で、どんな人達が作っているのだろうか。どんな苦労の物語があったのかなど、日常に疑問をもって暮らしていますか。

小学校に入学してから今日まで、当たり前のように毎日食べてきた学校給食ですが、昨年、考えさせられる出来事がありました。それは、私の家族が学校給食向けに野菜を出荷するようになったことです。

それまでは正直な話、「やった！今日の給食は大好きな献立だ。」位にしか考えてこなかった私ですが、野菜作りの手伝いをきっかけに、生産者側の目線で学校給食を見つめるようになりました。

両親が所属する生産者の会には、今、大きな課題が浮かび上がっています。それは、生産者の高齢化です。会の生産者の平均年齢は七十代で、若手の新規参入がなければ、将来的に学校給食を支える生産農家は減り、地産地消を継続することが難しくなる可能性があります。これは、由々しき問題です。少子高齢化の問題が、学校給食にまで及んでいるのです。

そこで私は、農家の減少や高齢化について、自分なりに調べてみることにしました。農林水産省の統計によると、二〇一五年から二〇二二年までの七年間で、農家の数は五十三万人減少し、約百二十二万人となっていることが分かりました。全体の平均年齢は約六十八歳で、これは喜多方市の生産者団体の平均年齢とほぼ一致しており、日本全体の問題であることが浮き彫りになりました。

それでは、なぜ、農家が減少しているのでしょうか。私の中で考えられる理由は、農業という職業は、重労働、儲からないなどのネガティブなイメージが強く、現代の若者に農業の面白さが伝わっていないことだと思われます。

しかし、私達喜多方市の子ども達は、農業の面白さや大切さを身に染みて分かっています。なぜなら、農業科での経験があるからです。

喜多方市の小学校では、毎年農業科と呼ばれる作物を育てる授業があります。農業科とは、野菜作りを通して、人と作物と自然の繋がりの大切さを学ぶ授業です。私は農業科で、さつまいも、カボチャ、お米、大豆を作ってきまし

た。時には教科書に載っていないような困難もあり、収穫に至らないこともありましたが、自分達で原因を考え行動し、失敗から学ぶことも多くありました。農業科は、作る喜びだけでなく、自然の厳しさも私達に教えてくれました。

農家である父は、私によく言っています。

「農業は作って、食べて、終わりで満足してはいけない。職業として成り立たせるには、経営まで勉強するべきだ。」と。

そこで私は、学校給食用に作った野菜を、冬休みの期間だけ直売所でも販売してみることにしました。出荷した日は、十二時と三時、そして最終の六時にメールにてリアルタイムで売上が報告されます。売上から掛かった費用を差し引き、どのくらい残るのか、毎日ワクワクしながら計算しました。クリスマス近くの三連休や仕事納めが終わった年末は特に売上は上がり、面白いように売れました。自分達が作った野菜を、お金を払って誰かが買って食べてくれる。こんなに嬉しいことはありません。まさに、農業の醍醐味です。

農業科では学べなかった経営部分の面白さ、農業のポジティブな一面を、私はもっと広く発信したいです。その為には、学校給食用の野菜作りにも積極的に関わっていき、私自身も農業をもっと学んでいくつもりです。

私達が毎日のように食べている学校給食。そこには、高齢化の問題やたくさんの人達の思いやそれぞれの物語が詰まっていることを、皆さん忘れないでください。

私は今年度いっぱいで義務教育を終えます。義務教育が終われば、給食も終わるということ。来年の春からはお弁当生活です。

もうすぐ学校給食は食べられなくなってしまうけれど、来年もまた私は種を蒔き、作物を作ります。皆が笑顔になる学校給食、そして、農家の未来のために。

令和５年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【特別審査員】　（敬称略）

関東学院大学理工学部　教授	佐藤　幸也
喜多方市教育委員会　教育長	佐川　正人

【審査員】

喜多方市立熱塩小学校長	下重　祐三
会津農林事務所喜多方農業普及所 経営支援課長	穴澤　崇
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主査	一条　昌恵
ＪＡ会津よつば喜多方営農経済センター　営農振興課長	宮下　貴明
喜多方市小学校農業科支援員	山田　義人
喜多方市産業部農業振興課長	大場　悟

【事務局】

喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	中野　富全
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事	五十嵐　直登
喜多方市教育委員会学校教育課 農業科活動推進員	相良　悠果

令和５年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

令和６年３月　　発　行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会